

特集 地域における「つながり」を形成するために

落書きや貼り紙をなくして きれいな景観づくりを

原 園 信 夫 (はらぞの のぶお) さん

●平塚をみがく会代表 [神奈川県平塚市]

<http://www.geocities.co.jp/hiratsukamigakukai/>



「ブローケン・ウィンドウズ・セオリー」を理念として

スプレーペンキの落書きや貼り紙、七夕祭りのゴミなど、かつては街の美観を損なう要素が多く見られた平塚市で、環境美化活動を続けている「平塚をみがく会」は、ロンドンから帰国した一人の女性の呼びかけがきっかけとなり、平成14年3月に設立された。

その活動の基本理念となっているのが、米国の犯罪学者ジョージ・ケリング博士が提唱した犯罪予防理論「ブローケン・ウィンドウズ・セオリー（割窓理論）」。

これは、1枚の割れた窓ガラスをそのままにしておくと、次々とほかの窓ガラスも割られ、やがて街全体が荒れて、犯罪が増えていく。だからたった1枚のガラスでも割れたらすぐに修繕しようというものである。

「平塚をみがく会」による具体的な美化活動は、ワールドカップサッカー大会の日韓共同開催に伴うナイジェリアチームの受入れと、毎年7月初旬に開催される盛大な平塚七夕まつりまで

に市内をきれいにしたいとの地元商店街の要望によってスタートした。現在20名余で構成されるメンバーのほとんどが社会人のため、活動は週末が中心で、高齢者を中心とした「ひかり隊」、女性を中心とした「かがやき隊」など、グループごとに明るく、楽しく作業をしている。

自分たちの街は自分たちの手できれいにしたい

地元の塗料メーカーからは、落書きを消す溶剤使用についての支援をうけている。今までは消すのに20~30分かかった落書きも専用の洗浄液を使って、5分で消せるようになったという。また、単に落書きを消すだけでなく、地域の小・中学生たちに、きれいになった壁に思い思いの絵を描いてもらう「アート制作」活動もユニークである。小・中学生によるこの壁画アートは、巨大なキャンバスを相手に絵を描いたという思い出づくりをしながら、落書きの再発防止にもつなげる取り組みである。

自分たちの街は自分たちの手できれいにしたい。こうした市民一人ひとりの思いがV活動へとつながり、行政、企業、さらには子どもたちをも巻き込んだ取り組みへと発展した。

現在の活動は平塚市内にとどまらず、藤沢市、茅ヶ崎市、鎌倉市、横浜市都筑区といった地域にまで及び、5市の関係者との協働による落書き消しキャンペーンを展開している。

同会では今後、さらなる活動の場を広げて、落書き、貼り紙のないきれいな街にするだけでなく、子どもたちの絵であふれる豊かな景観づくりにも挑戦していく予定である。



ユースボランティアによる落書き消し



中学生たちによる「アート制作」

居場所づくりを通して 地域に「つながり」をつくる

相 川 良 子 (あいかわ よしこ) さん

●渋谷区青少年教育コーディネーター

[東京都渋谷区]

<http://www.huanying.jp>



地域における青少年の居場所づくりに向けて

子どもや若者が異世代・異年齢とのかかわりの中で、社会を知り、自立していくための多様な「場」をつくることを目的として、平成11年に設立された「渋谷ファンイン」は、渋谷区内11か所の地域施設のスペースで、大人と子どもがつくる地域活動を通して、地域の中に青少年の居場所づくりを推進しているボランティア組織である。「ファンイン」とは中国語で「歓迎」という意味を持つ。

この居場所づくりへの取り組みは、平成10年に開催された、同区内の上原社会教育館の主催講座「中高生生倶楽部」をきっかけとしてスタートし、翌年この講座に地域の有志が加わり「上原ファンイン」が誕生した。この年は、学校週5日制が目前に迫っていることなどを背景に、文部省(当時)が全国展開した「全国子どもプラン」の初年度であり、その中の一つである「子ども地域活動促進事業」の委託を受けてさまざまな体験活動を支援してきた。

そして12年には、この活動がさらに渋谷区内7地区に広がり、各地区とも文部省の委託を受け「渋谷区子どもの居場所づくり実行委員会(渋谷ファンイン)」が誕生した。7地区の各グループは、地域や活動場所の特色を活かし、独自性を持って互いに連携しながら、渋谷ファンイングループとして活動を始め、現在は11地区へと発展している。

つながりや体験を通して「育ち」をサポート

「渋谷ファンイン」の活動のねらいは、居場所づくりにかかわる異世代の個人的なつながりを通して、まちづくり、地域づくりに参加していくことにある。

「渋谷ファンイン」では、区内の企業のオフィス、学校、公共施設を「気軽に立ち寄れる場」として借り受け、大人や若者、

そして子どもたちのそれぞれが自発的に集まり、自分たちで自由に過ごし、誰もが居心地のいい場所でのさまざまな活動を実施している。

運営にあたっては、元 PTA にかかわっていた地域の人たちを中心に、企業 OB や NPO、自営業者、主婦などの多彩なスタッフを主体とし、若者たちがボランティアでユースパートナー、サポーター、プレーリーダーとして支える体制がとられている。不登校や引きこもりの子どもには、ピア(対等・仲間)サポーターが対応する。

この取り組みによって、人と人、人と地域との新たなつながりや広がり形成といった大きな成果が生まれており、今後もネットワークの輪をさらに広げていく考えだ。

「渋谷ファンイン」の活動内容

- ①たまり場活動
子どもたちが気軽に立ち寄り、異年齢でのふれあいができる場所としてユースパートナーと一緒に活動する。
- ②サークル活動
子どもたちに希望の多いバンド、スポーツ、ダンス、手芸等の活動を、サポーター(指導者)が継続的に指導する。
- ③体験活動(イベント)
自然や人とのふれあいを中心としたさまざまな体験活動を企画実施するほか、地域の活動にも組織として参加する。

たまり場で、遊びのプログラムを待つ子どもたち(上原ファンイン)



学校帰りにおしゃべりし卓球でひと時を過ごす中学生(代官山ファンイン)

「広がれボランティアの輪」連絡会議シンポジウムから

「広がれボランティアの輪」連絡会議では、ボランティアの原点と課題、そして今後求められるボランティア・市民活動推進の方向性を示す目的のもとで、提言「ボランティアの原点とこれから」をとりまとめました。その主要なテーマとなったのが、地域における「つながり」形成の重要性です。

今号特集は、同連絡会議主催のシンポジウム「提言・ボランティアの原点とこれから～地域における『つながり』の形成と活動推進者の役割」を通して、ボランティア・市民活動推進者が地域課題の解決に向けての「つながり」を形成するうえでのヒントを探ります。

共同募金配分の審査を 公開プレゼンテーション方式に

子どもが参加して審査する公開プレゼンテーション

鶴ヶ島市社会福祉協議会では、従来の共同募金の配分方法を見直し、助成金審査会を「公開プレゼンテーション方式」とすることで、生きたお金の循環をつくり出している。

審査の流れは、書類による一次審査、子ども審査員が参加する公開プレゼンテーションによる二次審査、大人審査員による三次審査の3段階を踏むことになっている。

公開プレゼンテーションでは、応募団体は3分間で活動紹介や助成金の必要性を訴える。一方、審査員は、小・中学生の子ども審査員、専門家やボランティアの運営委員により構成された大人審査員、団体審査員（応募団体すべてが自分の団体以外に投票）が担う。

子ども審査員を設けた意図は、子どもたちが街頭募金を通して集めたお金の使い道を、子どもたち自身によって判断してもらうためである。また、子どもたちにとっては、審査会への参加を通して地元のさまざまな生活課題や、それに対する地域活動を知る機会となっている。

新たなネットワークづくりや協働を生み出す成果も

公開プレゼンテーションの最大のねらいは、助成金決定のプロセスの透明性と公開性アップであるが、それ以外にも相乗効果としてのメリットもある。審査のプロセスを通じて、市民と団体、あるいは団体同士の交流が生まれ、新たなネットワークや協働にもつながっている。また、公開プレゼンテーションの中で交わされる質問や助言は、助成されるか否かにかかわらず、申請団体の活動にとって非常に有効なアドバイスにもなっている。

審査基準は、まだまだ試行錯誤中との課題があるものの、必要なところまでできるだけ、有効に助成するという仕組みづくりという意味では着実な成果があがっている。

牧野 郁子（まきの いくこ）さん

●社会福祉法人鶴ヶ島市社会福祉協議会
[埼玉県鶴ヶ島市]
<http://www.tsurusha.or.jp/>



鶴ヶ島市社会福祉協議会では今後、審査員を経験した子どもが街頭募金を通して、お金の循環を体験する仕組みをつくったり、助成金で実施した事業を記録し多くの市民に知ってもらうような働きかけを行うなど、創意工夫を凝らしてプログラムを発展させていく方針である。

また、今年度から試行段階であるものの、共同募金配分金に加えて、一般の市民や地元企業からの協賛金を上乗せして配分できる仕組みをつくり、多くの市民に「お金の循環」と「人」と「活動」が繋がっていく仕組みをつくっていきたいと考えている。



子ども審査員も参加する二次審査

鶴ヶ島方式「公開プレゼンテーション」の特徴

- ①子ども参加型
子どもたちが審査員となり、地域の団体の活動を知り、募金の使途について考え、決定に参加している。
- ②透明性・公平性の確保
審査過程はすべて公開。対話を通しお互いを活かし合う関係づくり。多様な審査員（子ども・大人・団体）がかかわっている。
- ③循環するお金（寄付）
寄付する人・活用する人が直にかかわることで、次の寄付へとつながっていく。

シンポジウムコーディネーターから一言



村上 徹也（むらかみ てつや）さん

日本青年奉仕協会 調査研究員
（「広がれボランティアの輪」連絡会議
提言ワーキングリーダー）

シンポジウムでは、地域における「つながり」の形成について、それぞれに異なった立場で実践している3名の方からご報告いただいた。

「平塚をみがく会」の原圃さんには、一人ひとりのボランティアから活動の輪をどう広げていくかの事例としてご発表いただいた。落書きを消すために必要な技術を持っている人を地域の中から見つけ出し、「あなたが必要だ」と声をかけたことが発展のきっかけとなっている。市民の一人ひとりに「自分でなければ」という使命感が生まれたことによって、新しいボランティア仲間が生まれ、さらには、絵を描くことが得意な子どもたちにも、自分たちの能力を活かせる活動として成果をあげている。

「渋谷ファンイン」の相川さんには、地域とのつながりをつくる活動の重要性についてグループ・団体支援者の立場からご示唆いただいた。「渋谷ファンイン」の取り組みは、子どもたちの「居場所づくり」を目的に、自治会などの地縁組織や、NPO などの課題解決型の組織、そして学校や企業関係者などのさまざまな人材を活かしながら異世代・異年齢間の活動を発展させている点が興味深い。

そして、鶴ヶ島市社会福祉協議会の牧野さんからは、つながりの形成における中間支援組織としての役割についてご示唆いただいた。共同募金の配分に関する審査会の公開プレゼンテーション制度は、単に新しい方式の審査会を導入していることにとどまらず、お金が動いていくことの透明性・公平性を持たせるとともに、地域を豊かにするための人と人とのつながりを強化していく仕組みとして、さまざまな波及効果を生んでいる点に注目したい。

これらの報告が、地域での新たな「つながり」を生み出すうえで、活動者や活動推進者にとっての示唆を与え合うものとなることに期待したい。

提言「ボランティアの原点とこれから」について

提言をまとめるに至った経緯

「広がれボランティアの輪」連絡会議（以下、連絡会議）では、平成 14 年から3年間をかけて、「コミュニティの再考」をテーマに提言をまとめ、V・市民活動の視点からこれからのコミュニティ形成を考えることを通し、市民としての主体形成、すなわち日本に市民社会を築いていくプロセスについて示してきた。

今回の提言は、ここで提示された方向性をさらに確実なものとして認識を深め、広げるためには、ボランティアそのものの本質を見つめ直す作業が必要ではないかという問題意識からスタートした。

「提言」作成の検討にあたっては、多くの人々から自らの考える「ボランティアの原点」についての声を集め、それをもとに提言をまとめるという方針のもと議論を積み重ねてきた。議論の場では、人それぞれに多種多様な「ボランティアの原点」と、そこから見えてくるコミュニティの課題やそれを解決する具体的な取り組みなどについてさまざまな意見が出された。

連絡会議では、さまざまな立場にあるボランティアや市民活動にかかわる人たちが、自ら「ボランティアの原点」を見つめ直すことを通して、

1. これからのコミュニティ形成の中での自分たちの活動を理論的に再確認すること
2. 具体的な課題解決の行動原理とボランティアの関係を整理すること
3. 行政とV・市民活動など、異なる行動原理を越える協働の原則や戦略を見つけ出すこと
4. それらがもとになって市民が市民として自由に認め合い、支え合って生きることができるようコミュニティに厚みをつけていくこと

以上の点をねらいとして、今回の提言「ボランティアの原点とこれから」を取りまとめた。

提言「ボランティアの原点とこれから」の概要

一人ひとりへの提言

- ・「お互いさま」を原点にして、社会に開かれた助け合いのV活動を広げよう
- ・「世代間のつながり」を原点にして、人と人をつなぐV活動を広げよう
- ・「自らの弱さ」を原点にして、当事者性からV活動を広げよう
- ・「自由意志」を原点にして、身近な誘い合いでボランティアの輪を広げよう
- ・V活動のインセンティブを見つけて「共生」の原点に向かおう

Vグループ・団体やNPOへの提言

- ・エリア型のコミュニティとの連携を深めるコーディネーターを位置づけよう

- ・異世代協働と変化する課題への対応を積極的に行おう
- ・人と人がつながり、誰もが当事者になれる「場」をつくらう
- ・コミュニティの潜在的な資源を発掘してV活動に結びつけよう
- ・メンバー一人ひとりのオーナーシップを育む仕組みづくりに取り組もう

V活動推進にかかわる組織への提言

- ・コミュニティにおけるV活動推進組織としてのポジションを再考しよう
- ・教育機関とコミュニティがつながるプラットフォームの要になろう
- ・ソーシャルインクルージョンについての継続的な学びと研究を事業に位置づけよう
- ・コミュニティの資源（人・物・金）を積極的に掘り起こす事業展開を考えよう
- ・ソーシャルキャピタルを生み出す役割を担うための研究や取り組みをしよう

「広がれボランティアの輪」連絡会議の提言活動

連絡会議は、全国的なV・市民活動を推進・実施する53団体（平成18年6月現在）から構成され、いつでも、どこでも、誰でも、楽しくV活動に参加できるような環境づくり、気運づくりを進める目的で、様々な取り組みを実施している。

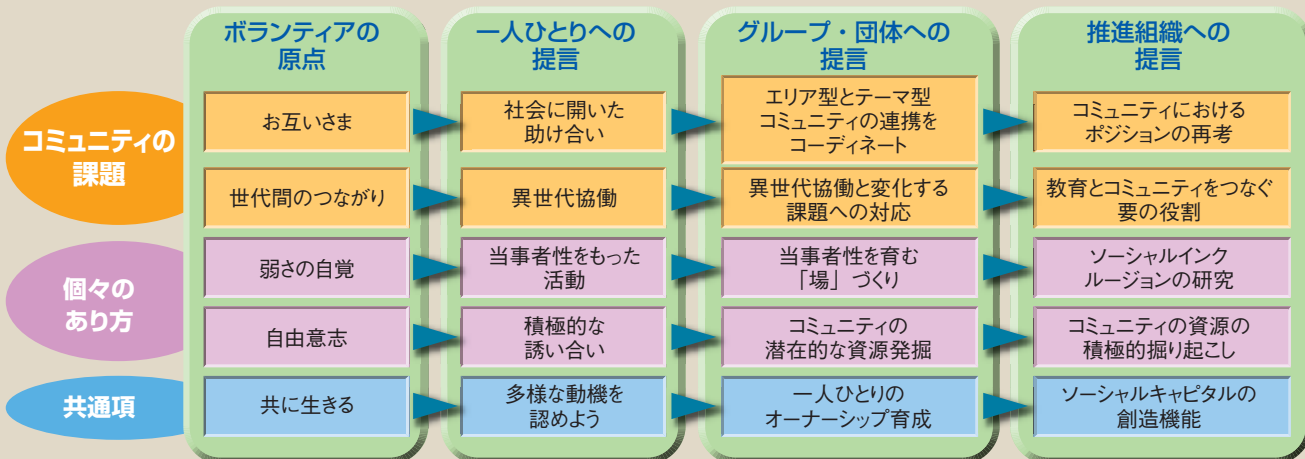
「提言」の発表は、同連絡会議が取り組む主要な活動の一つであり、V活動に対する社会的な評価、支援のあり方などについて、その時代状況を反映しながら、これまでに11の提言を発表してきた。

これまで連絡会議が発表した提言は下記のとおりである。

発表年月	内 容
平成 7 年 6 月	「ボランティア活動に対する社会的な支援策に関する提言」 「阪神・淡路大震災における支援活動を通して学んだこと・提言」
平成 8 年 6 月	「行政とボランティア、NPO とのパートナーシップ、行政による支援のあり方に関する提言」
平成 9 年 6 月	「ボランティア団体に対する資金支援のあり方に関する提言」
平成10年 6 月	「子どもがかかわる、学校がかかわる、地域がかかわる ～子どもたちの豊かなボランティア体験学習・活動のための提言～」
平成11年 6 月	「災害救援活動におけるボランティア支援のあり方・提言」
平成12年 6 月	「国境を越え、平和な、希望のもてる新しい世紀を築くために 提言」
平成13年 6 月	「市民の力で共生の世紀を創り出すために 提言」
平成14年 6 月	「提言 コミュニティの再考（序章）～私たちにとっての課題とは？～」
平成15年12月	「提言 コミュニティの再考（第2章）～活動事例から学ぶこと～」
平成16年 6 月	「提言 コミュニティの再考（第3章）～葛藤から共生へ ボランティア・市民活動団体に期待されること～」

※今回の提言「ボランティアの原点とこれから」をはじめ、過去の提言については、連絡会議のホームページ（<http://hirogare.org>）より閲覧できます。

【今回の提言の構成図】



※ここで示している「ボランティア原点」は、たくさんの方々から寄せられたメッセージの中から、連絡会議ワーキングチームが注目すべきと考えた5つのみを取り上げたものです。人それぞれに多種多様な原点があるという前提のもとに今回の提言はまとめられています。